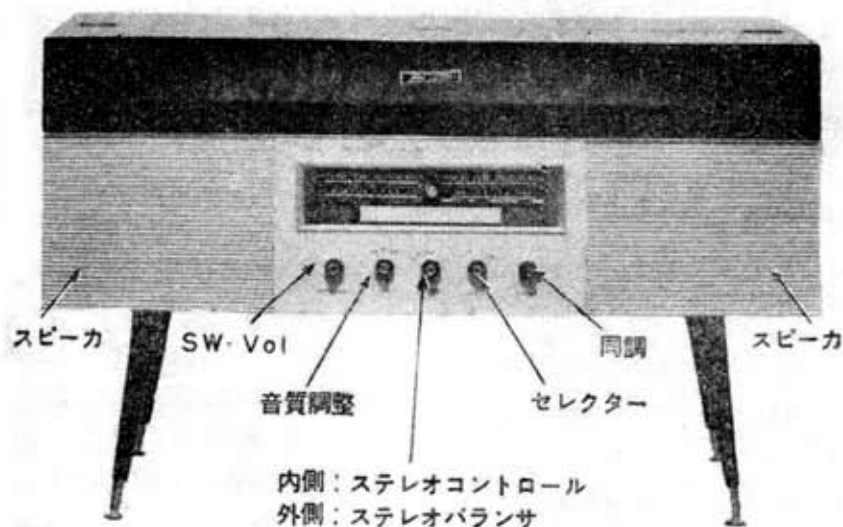


# 東芝 FS-145形

正価 38,000円



## 外観：

45/45 レコードが“臨場感”なるモトローをにかけて音楽ファンの中に急激に浸透して以来、ステレオにあらざればレコードにあらざという時世の観を呈してきました。

一方放送の方も NHK をはじめ、商業放送局間の協力によつて2波を使ったステレオ放送の時間が次第に増えつつあります。

このような要求に対して、市販ステレオ電蓄にはチューナ部も2chを内蔵するものが多くみられるようになって来ました。

本機は極めて一般的な普及形ステレオ電蓄として、東芝が発表したお得意の薄形タイプです。ステレオを最もよく聴くには、両側のスピーカ間隔をどのぐらいはなせばよいかはまだまだ論じられねばならない問題ですが、一説には3m なければならぬといい、一説では1m 30cm あれば十分であるともいわれています。ただ、現在の都市生活にみられるように、ステレオ電蓄に大きなスペースを占有させることは

不可能なことです。こんな点からも、東芝ファミリシリーズにみられる、他社にさきがけて薄形化した合理性には感心させられます。

体裁は写真でみられるように、中央に受信、再生系のつまみが配され、左右のスピーカボックスと一体となつて和室、洋室のいずれにもマッチするようシックなムードをもたせています。

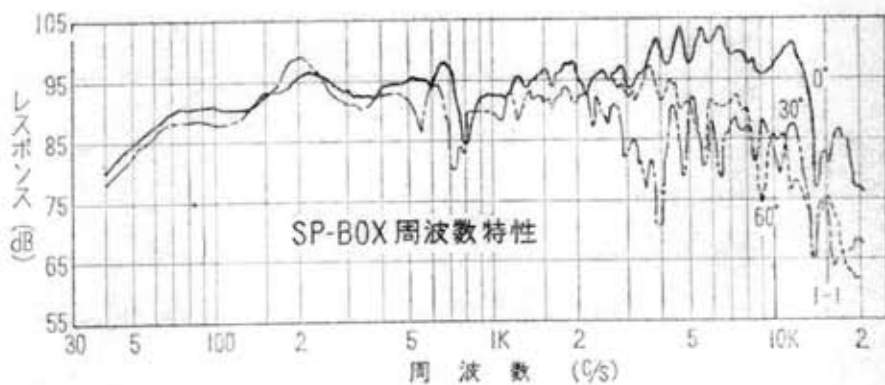
ウッド（木部）をふんだんに使い、白とダークな配色にコントラストを保たせています。価格も手頃で、家庭用として可成り親切なセットといえるでしょう。

## 回路構成：

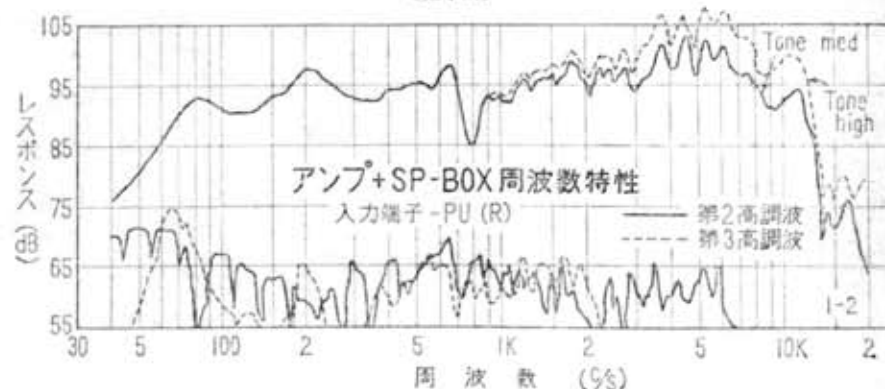
150mA シリーズのセミ・トランスレス式で、10球2チャンネルの2バンドスーパーです。但し、片一方は短波のステレオ放送は不必要というわけで1バンドになっています。ラジオ部分は極めてスタンダードなもので、保守の点を重視しなければならぬ家庭用として、安全堅牢な道を選ぶのはメーカー製品の常道といえるのでしよう。

出力段は30A5 シングルです。出力、歪の点からみて、6畳の部屋とか4.5畳が標準的な広さですから、1.5W無歪というのは必要十分なところでしよう。

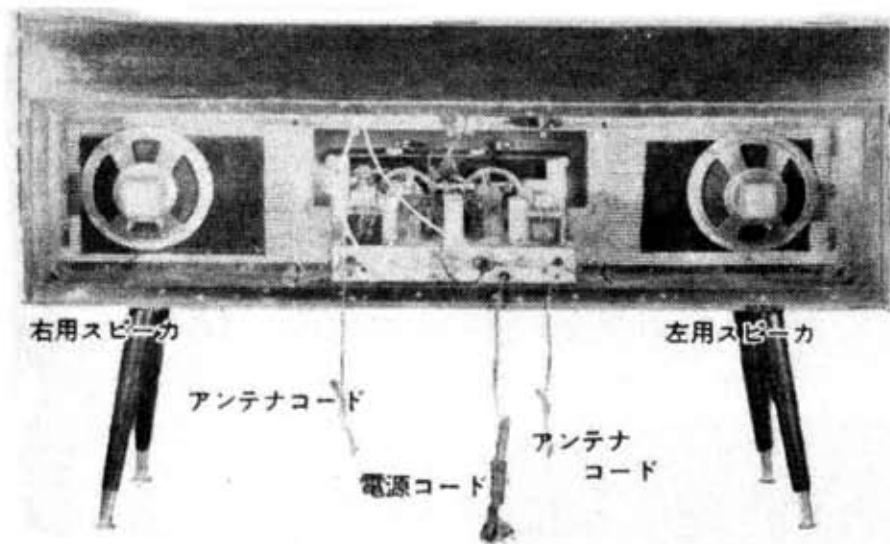
プレーヤ部の特徴・規格は、モータ



(第1図)



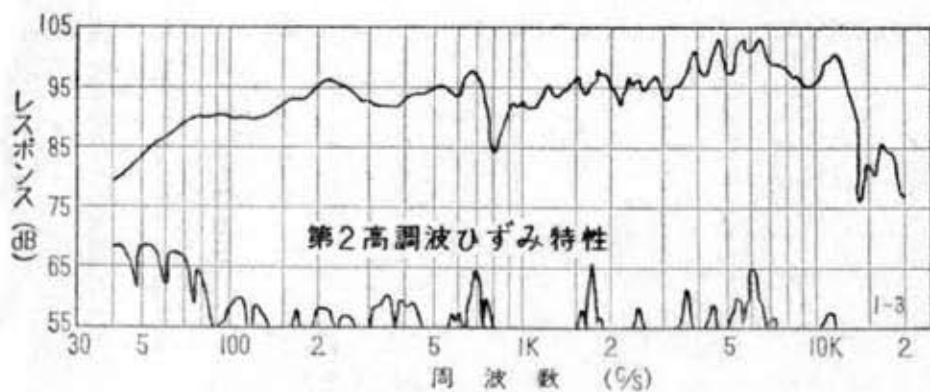
(第2図)



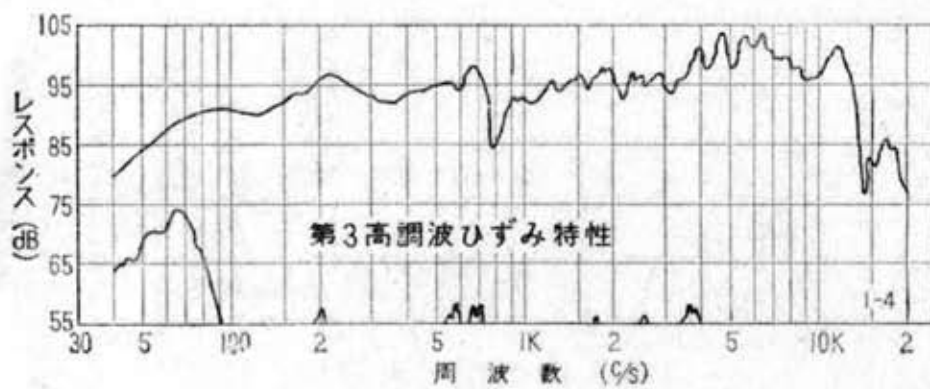
東芝 FS-145 形の定格

|         |  |
|---------|--|
| 方式      | 10球2チャンネル2バンドスーパー                                |
| 受信周波数範囲 | MW (535~1605kc×2) SW 3.9~12Mc                    |
| 感度      | 極微電界級  |
| 出力      | 無歪 1.5W×2, 最大 2.0W                               |
| 消費電力    | 60VA   |
| 使用真空管   | 12BE6×2, 12BA6×2, 12AV6×2, 30A5×2, 35W4×2, 6ME10 |
| 使用スピーカ  | 18cm, 8Ω   |
| 外形寸法    | 幅1100×奥行370×高さ380(mm)脚290mm                      |
| 製品重量    | 18.8kg   |

にインダクションモータ、4スピード (16 $\frac{1}{2}$ , 33 $\frac{1}{2}$ , 45, 78r.p.m.) を使用しています。ピツクアップはクリスタル・ステレオ・ターンオーバー式の簡単な操作で、使用者の便をはかっています。ステレオ・エフェクトは終段 30A5 のグリッドリークに 3M の VR を用



〔第3図〕



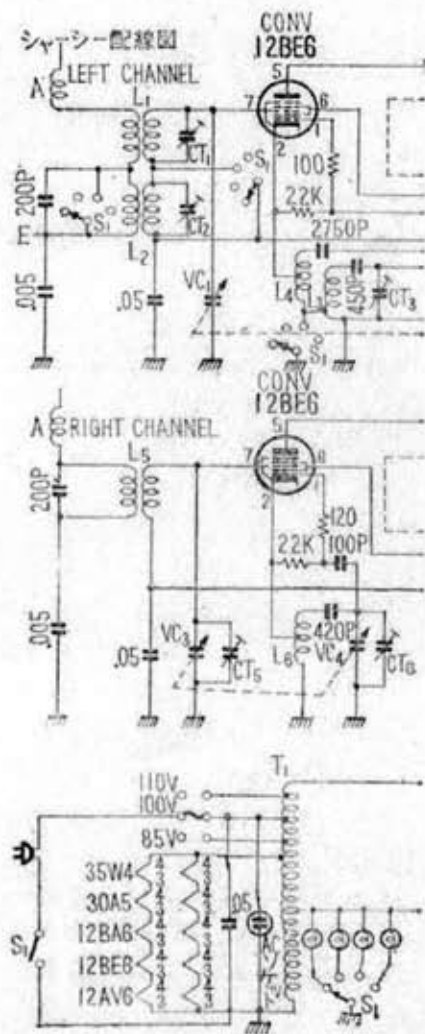
〔第4図〕

いることで、簡便に効果をあげています。

特性実測データ:

第1図をみてみましょう。スピーカボックスのみの周波数特性は良好な形を示しています。指向性も60°方向で高域低下がみられますが、実用上十分でしょう。

ただ、第2図と比較してみれば、第3図、第4図の高調波ひずみ特性が普通のレベルにあるのに、オールオーバーの場合にはかなり増えているのが目立っています。特に低域のひずみが目立っていますが、第2高調波成分が大きいことを考えれば、終段シングルアンプであることが影響しているかと思われます。このことは価格とらみ合わせれば十分な特性であると言えるべきでしょう。高域成分での低下はツイータの取り付け位置に問題がありそうで



# 市販ステレオ電蓄の音響特性実測

すが、オールオーバーでの Tone-High では逆に 2~4dB もアップさせていますので、部屋の音響状態ともならみ合わせて聴取時のトーン調整でよい 1 特状態にセットすることができます。インピーダンス特性が低音域で共振の山が二つありますが、この中の低い周波数の方はスピーカの共振、高い方はキャビネット共振の影響でしょう。これはセットとスピーカボックスとが分離されて別々のケースに取められているために生じたものです。

このように二つのスピーカをセットから分離することはキャビネットの容積が小さくなって、その共振があらわれやすい欠点がありますが、独立したスピーカシステムを採用することは好ましい方向だと思われます。

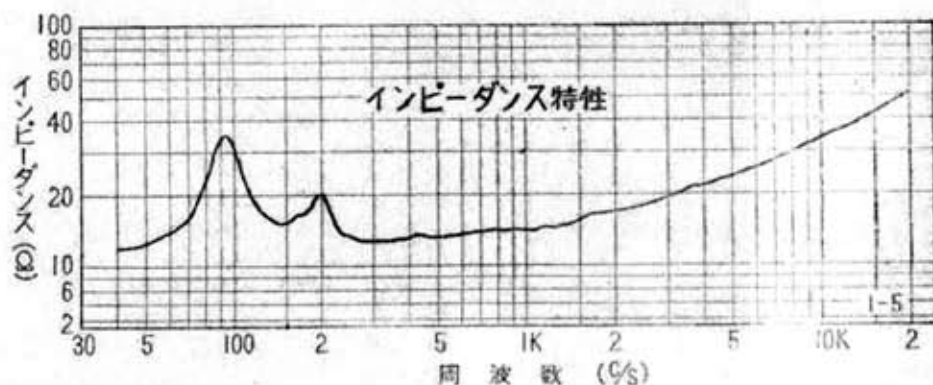
最後にセット全体の時とスピーカボックスのみの場合の周波数特性レスポンスを比べてみます。殆んど一致し

ています。このことはセットとスピーカとのマッチングがうまくいっていると考えてよいでしょう。

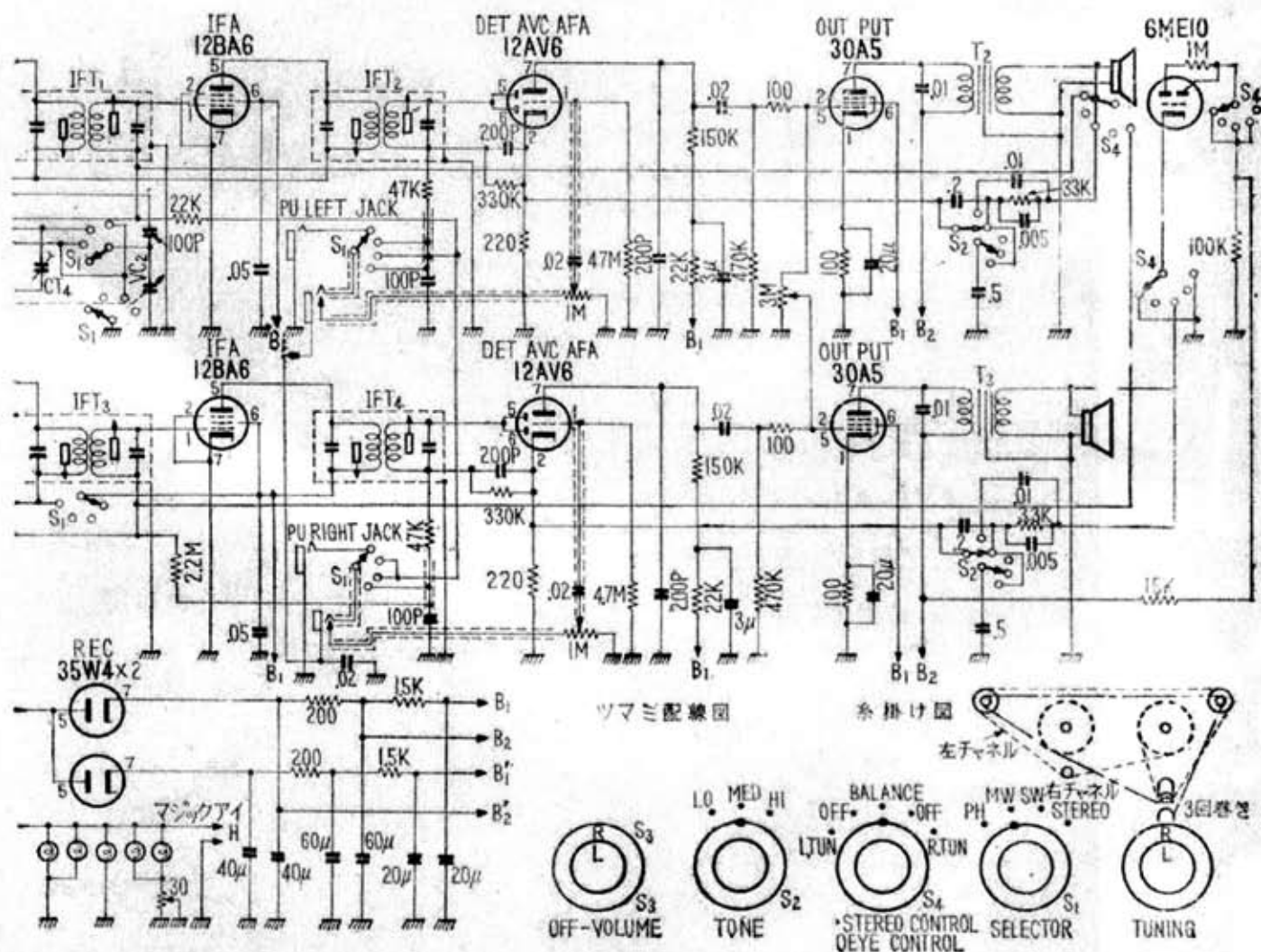
折角よいアンプ、よいスピーカ系を備えても、両者の連結点、すなわち OPT 端子とスピーカ系とのマッチングがうまくとれていないと、思つた程の効果をあげ得ないことは、アマチュア諸兄が自作アンプですでに御経験済みの通りです。

いずれにせよ、本機にみられる音響特性と甚だコンパクトな設計手法は、スペース・ファクターの点から、外観体裁の点から、限られた価格内での苦心のほどがのぞかれるといえそうです。

☆ ☆ ☆



(第5図)



(第6図) 本機全回路図